播種性「スポロトリコーゼ」ノ一剖檢例

Drs. Hukue Nisi and Yuzuru Morikawa: A dissected case
of generally disseminated sporotrichosis.

熊本醫科大學病理學教室(主任 鈴江教授)

西 富 久 惠
ニシ フ ク エ
同 耳鼻咽喉科教室(主任 鰐淵教授)
森 川 讓
モリ カハ ユズル

目 次

I. 緒 言	B. 組織學の所見
II. 症 例	III. 總括及ビ考按
1. 臨牀的所見	IV. 結 論
2. 剖檢的所見	附. 引用文献
A. 肉眼の所見	

I 緒 言

「スポロトリコーゼ」ナル疾患ハ1898年米國ニ於テ Schenck⁽¹¹⁷⁾ 氏が甫メテ報告セシ一種ノ絲狀菌ニ依ル膿瘍形成ヲ伴フ慢性淋巴管炎ニシテ、Smith⁽¹²⁰⁾ 氏ハ「スポロトリヒウム」ナル一絲狀菌ニ因ルナラントシ。次デ1899年 Byton⁽²³⁾ 氏が同一經過ヲ示セル一症例ヲ報告シ、1900年 Hekton u. Perkin⁽⁵⁵⁾ 兩氏ハ其絲狀菌ノ分離培養ニ成功セリ。

其後1903年フランスニ於ケル De Beurmann et. Gougerot⁽⁸⁻¹⁵⁾ 氏等並ニ其門下生等ニ依リテ爲サレタル綜合的研究ヲ機トシ、爾來各國ニ於テ細菌學的並ニ病理學的、或ハ臨牀的、將又實驗的の方面ヨリノ研究成績相踵イデ報告セラルルニ至レリ。

本邦ニ於テハ大正8年甫メテ西澤、田邊⁽⁹⁹⁾兩氏

ノ報告アリ、其後漸次學會報告或ハ原著トシテ臨牀的及ビ實驗的報告^(34, 35, 59, 64, 70-74, 76, 91, 95, 100, 113, 114, 125-128, 130, 134)ヲ見ルニ至リタルモ、然モ尙ホ稀有ナル疾患ニ屬ス。

而シテ本疾患ノ症狀ハ結核或ハ黴毒等ノ如キ慢性炎症ニ見ル所見ニ似テ極メテ多岐多様ナル症狀ヲ呈シ、經過モ亦數ヶ月乃至ハ數年ニ亘リテ屢ニ誤診セラル、事アリ。其豫後概シテ佳良ナルモ時トシテ卒然急性ニ變ジテ惡化汎發シ、敗血症ノ症狀ヲ呈シテ死ノ轉歸ヲ取ル事アリ。外國ニ於テハ斯クノ如キ不良ナル轉歸ヲ取レル數例ノ報告アリ。然ルニ本邦ニ於テハ余等ノ涉獵シ得タル文献ノ範圍内ニテハ未ダ斯カル症例ヲ見ズ、殊ニ其病理解剖ニ附セラレ詳細ナル檢索ヲ遂行セラレタルモノハ絶無ナリ。

余等ノ一人森川ハ當大學耳鼻咽喉科教室ニ於テ、突然惡寒戰慄ヲ以テ發熱、舌尖ニ於ケル發赤腫脹並ニ口唇周邊部ノ結節形成ヲ以テ發病セル15歳女子ノ患者ニテ、漸次潰瘍形成ヲ生ジタルヲ以テ傳染性膿痂疹並ニ瀰蔓性纖維素性淺在性口内炎ノ診斷ノ下ニ種々治療ヲ試ミルト共ニ、其白苔ノ一部ノ細菌學的並ニ組織學的檢索ヲ行ヒ菌檢索ニ努メタル結果、培養上ニ一種ノ絲狀菌ヲ認メタルヲ以テ其後ハ沃度加里ノ内服、沃度劑ノ塗布及ビ注射ノ併用ヲ行ヒタルニ依リ一

時快方ニ向フヤノ徴ヲ示シタルモ再ビ増惡、敗血症ノ如キ症狀ヲ呈シテ死ノ轉歸ヲ取り病理解剖ニ附セラレタル一症例ニ接セリ。西ハ之ヲ病理解剖學的方面ヨリ觀察セシ所、各所ノ皮膚ノミナラズ、口腔及ビ鼻腔ヨリ肺及ビ肛門部ニ至ル呼吸器並ニ消化器系其他造血臟器ニモ同様ナル播種性「スボロトリコーゼ」ノ發生ヲ見タルヲ以テ茲ニ其臨牀的並ニ病理解剖の所見ヲ報告セントスルモノナリ。

II. 症

例

1. 臨牀的所見

患者。15歳ノ女子。福岡縣三池郡駛馬町ニ於テ會社員ノ子トシテ生レ、未ダ故郷ヲ出タル事無シ。家族歴。父ハ行衛不明、母ノミ健在。兄弟5人ニシテ患者ハ第4子ナリ。第2、第5子ハ肺炎ニテ、第3子ハ病因不明ニテ死亡ス。

既往症。患者ハ生來虛弱ニシテ3歳ノ時麻疹ニ罹患、又屢々扁桃腺炎ニモ罹患ス。

現病歴。昭和14年9月突然舌尖ニ發赤ト腫脹部ヲ生ジ、次デ惡寒戰慄ヲ伴ヒ發熱ス。局所ハ無痛性ナルモ流涎甚ダシ。仍テ地方醫ヲ訪レタルニ胃病ト診定サレ治療ヲ受ケタルモ輕快セズ。局所ハ漸次白苔ヲ以テ覆ハレ増惡蔓延スルト共ニ嚥下痛ヲ訴フルニ至レリ。發熱ハ稍々下降シタルモ尙ホ微熱アリテ、頭痛、流涎著明ナリシト云フ。

其頃ヨリ口唇部ニ「ヒリヒリ」感アリ。後チ此部ニ小潰瘍ヲ形成シ、分泌液ヲ漏ラシ、漸次乾燥シテ痂皮ヲ形成スルニ至ル。仍テ更ニ他醫ヲ訪レ「グイタミン」C劑ヲ注射ヲ受ケ嚥下痛ハ去リタルモ舌尖中央部ニ小腫瘍アルニ氣付クニ至レリ。尙ホ一般症狀ハ輕快セザルノミナラズ漸次衰弱ノ度加ハル狀態ニアリタルヲ以テ、遂ニ昭和15年11月20日本教室ヲ訪レ入院セリ。

1. 入院時ノ所見。

〔I〕 口唇所見。口唇ノ周圍ハ指頭大ノ結節ニテ

圍繞セラレ、其結節表面ハ黃色ノ厚キ痂皮ヲ被ムル潰瘍ヲ形成シ、分泌液ヲ漏出ス。

〔II〕 口腔所見。口臭甚ダシ。疼痛ノ爲メ開口不充分ニシテ、充分ナル檢査ハ不可能ナルモ、頰部粘膜、軟口蓋、舌表面ハ到ル所不正形斑點狀ノ白苔ト淺キ潰瘍ヲ形成シ、又舌尖中央部ニハ拇指頭大ノ肉芽性腫瘍アリ。

〔III〕 喉頭所見。疼痛ノ爲メ開口不充分ニテ檢査不能ナリキ。

〔IV〕 頭部所見。顱頂部ニ口唇ト同様ナル痂皮ヲ被ムル結節2個アリ。

〔V〕 上膊部。結節ノ既ニ治癒セリト思ハルハモノ2個アリ。

〔VI〕 顔面所見。左側頰部ニモ口唇ト同様ナル結節1個アリ。

〔VII〕 鼻腔所見。兩側共ニ異常ヲ認メズ。

〔VIII〕 全身所見。顔面蒼白ニシテ兩側頸部淋巴腺ハ小豆大ニ腫脹ス。

心臟。心音ハ正常ニシテ心尖搏動ハ第五肋間腔ニ於テ左側乳線ヨリ2横指内側ニ觸知ス。

肺臟。打診、聽診孰レモ著變ヲ認メズ。

腹部。異常ヲ認メズ。脾臟、肝臟共ニ觸レズ。

四肢腱反射異常ナシ。

血清反應。2氏、村田氏反應共ニ陰性。

血液像。赤血球數434.4萬、白血球數8750、血色素96%、白血球百分比：中性嗜好性細胞、桿狀

核細胞 5%。分葉核細胞 32.5%。「エオジン」嗜好性細胞 18.5%。淋巴球 36.5%。「モノチーテン」7.5%。

細菌検査。葡萄狀球菌。双球菌。桿菌。絲狀菌。螺旋菌。

經過。

入院當時口腔粘膜ハ到ル所不正形。斑點狀ノ白苔ト淺キ潰瘍トナ見ル。舌ノ中央部ニハ拇指頭大ノ肉芽ヲ作リ。口臭甚シク。上下口唇ノ周圍ハ指頭大ノ結節ニテ圍繞セラレ。其結節表面ハ黃色ノ厚キ痂皮ヲ以テ被ハレタル潰瘍トナル。又多クノ結節表面ノ痂皮ハ相互ニ融合シ。痂皮ヲ剝離セバ黃色ノ分泌液ヲ漏出シ。間モ無ク元ノ如キ厚キ痂皮ヲ形成ス。聲音ニ變化無シ。

以上ノ所見ヨリ口周ハ傳染性膿痂疹ノ診斷ノ下ニ10%「デルマトール・硼酸亞鉛華軟膏」ヲ局所ニ塗布シ。同時ニ「リバノール」ノ濕布ヲ行ヒ。口腔ハ硝酸銀ノ燒灼。「トリバフラビン」。及ビ「硼砂カウゼイン」ヲ塗布シ。「ロチノン」。「ビトン」。「トリアノン」等ノ注射ヲ行ヒタル結果。食慾ハ良好トナリ。嚥下痛ハ漸次減退シ。口腔内ノ白苔モ幾分消失シ。體重ハ急激ニ増加スルニ至リ。良好ナル經過ヲ取ルヤニ考ヘラレタリ。尙ホ培養試験。組織學的検査ヲ反覆シテ菌檢索ニ努メタル結果。口腔内ノ白苔ヨリ一種ノ絲狀菌ヲ發見セルニ依リ。沃度加里ノ内服。沃度劑ノ塗布及ビ注射ヲ開始セシモ。其後病狀ハ増惡シ。昭和16年1月20日頃ヨリ兩側鼻腔入口部ニ口周ト同様ナル潰瘍ヲ形成シ。痂皮ノタメ鼻閉塞ヲ訴フルニ至レリ。又其頃ヨリ38°C内外ノ發熱ヲ來タシ。咳嗽頻發シ。嘔聲ヲ訴フルニ至レリ。然レ共疼痛ノ爲メ喉頭鏡検査ヲ行フヲ得ズ。遺憾ナラシ喉頭所見ハ不明ニ終レリ。

又同時ニ呼吸困難ヲモ訴ヘタル爲。種々手當ヲ加ヘタルモ遂ニ敗血症ノ如キ症狀ヲ呈シ1月29日鬼籍ニ入リタリ。

培養所見。

麹培養基(C°)38°Cニ於テ2日後菌ハ發育シテ「コロニー」ヲ生ズ。其「コロニー」ヲ見ルニ中心部ハハ形ニ稍々隆起スルモ。其最中心部ハ陷凹シ。其周圍ハ之ヲ中心トシテ放射狀ノ皺ヲ見ル。又中心部ハ白色蠟樣光澤ヲ帶ビ。周圍ニ向フニ從ヒ其光澤

ハ減退シ。又「コロニー」周圍ニ向フ程培養基面ニ平ニ密着ス。尙ホ全面ニ發粉狀態ヲモ見ル。培養一兩日後ニハ中心部ヨリ着色シ。褐色ヲ呈スルニ至リ。之ヲ白金耳ニテ觸ルレバ非常ニ硬ク。容易ニ剝離シ難ク。又培養基中ニ深く埋沒ス。

顯微鏡の所見。

培養基ヨリ「コロニー」ヲ取り顯微鏡の検査ヲ行ヒタルニ。菌絲ト芽胞トヨリ成リ。菌絲ハ略々直線的ニテ不規則ニ分枝シ。樹枝狀ヲ呈シ。其菌絲中ニハ光線ヲ強ク屈折スル大小不同ノ顆粒ヲ散在性ニ見ル。芽胞ノ多クハ卵圓形。單細胞形ニシテ。菌絲ニ芽狀突起ニ依リ獨立シテ附着ス。

2. 剖檢の所見。

A. 肉眼の所見。

一般概觀。體重37.3 kg。體格。骨格寧ろ小。栄養稍々不良ナル一女屍。皮膚一般ニ色淡。濕潤。淋巴腺ハ各所特ニ腫大セルモノヲ認メズ。上下口唇ノ殆ど全面ニ互リ古キ暗黑色乃至汚穢黃褐色ノ痂皮ヲ附着ス。痂皮ヲ剝離シテ檢スルニ病變部ハ顆粒狀ヲ呈ス。同様ノ痂皮ヲ附着スル潰瘍ハ不正橢圓形乃至不規則ナル地圖狀ヲナシテ左右口角。下顎中央部等ニ散在ス。之ニ類スル潰瘍ハ口腔粘膜ニモ認メラレ。灰白黃色ノ痂皮ヲ附着セリ。兩側鼻腔ハ乾燥セル血餅ヲ附着シ。之ヲ剝離シテ粘膜面ヲ見ルニ顆粒狀ヲ呈ス。鼻毛ハ略々尋常ニ認メラル。外聽道等ハ異常ヲ認メズ。

頭部ハ顱頂部略々中央拇指頭大面ノ部ニ互リ固キ痂皮ヲ以テ被ハレタル部アリ。剝離困難ナルモ。口唇ニ認メラレタルト同性狀ナリ。右上腕伸側面略々中央部ニ黒キ痂皮ヲ以テ被ハレタル部アリ。之モ亦口唇ノモノト同性狀ナリ。

腹腔概觀。皮下脂肪纖ノ發育略々尋常。腹壁腹膜著變ヲ認メズ。大網。腸間膜附着部附近ノ淋巴腺ノ大豆大ニ腫大セルモノ2~3個。剖面髓樣。色淡乃至淡紅。特ニ限局性病變ヲ認メズ。其他一般ニ著變無ケル共胃ノ大體ハ左乳線上半肋緣下5 cm。正中線上11 cmナリ。斯クテ胃ノ下緣ハ臍上約3横指迄下垂ス。又子宮ハ右前方ニ強ク屈曲ス。

胸腔概觀。著變無シ。

心臟。130 g。屍者ノ手拳ニ比シ僅カニ大。心外膜概シテ滑澤。心内膜。瓣膜異常ナケル共筋質稍々褐

ヲ帶ビ潤濁ノ感アリ。

左肺臓。250 g. 外面概シテ滑澤、細血管ノ僅カニ充盈セル個所アリ。弾力性軟ナルモ稍々弾力性乏シキ感アリ。壓ニ依リテ捻髪音ヲ聞ク事常ニ比シ少シ。特ニ異常ノ硬結ヲ觸知セズ。剖面概シテ滑澤、色淡乃至淡紅ナルモ上葉下部、下葉下端ニ近キ部ニ於テ諸所小豆大ニ膨隆スル部アリ。又上葉背面ニ於テ表層近く周圍トノ境界不分明、灰白色透徹ノ感アル結節1個ヲ認ム。肺門部及ビ氣管枝周圍淋巴腺ノ小豆大乃至大豆大ノモノ數個、剖面淡紅色乃至黒灰色ヲ呈シ、特ニ限局性病竈ヲ見ズ。氣管枝内ニハ特ニ異常ノ内容物ヲ容レザルモ、泡沫ヲ含ム粘液ヲ僅カニ附着ス。粘膜面ハ可成リ細血管ノ充盈強ク、淡紅色ヲ呈シ、稍々粗糙ナル感アリ。

右肺臓。200 g. 上葉、中葉間ハ限局性ニ纖維性癒着ヲ營ムモ外膜一般ニ滑澤、著變ヲ認メズ。剖面滑澤、淡紅色ヲ呈スル部多シ。特ニ下葉上面約鶏卵大ノ部ハ僅カニ膨隆セル感アリ、暗赤色ノ度強ク、壓出血量常ニ比シ稍々多キ感アルモ、泡沫ヲ含ム液ヲ出ス事ハ稍々少シ。此暗赤色ナル部ノ一片ヲ水中ニ投ズルニ沈降ス。剖面ニ於ケル氣管枝内面ハ細血管ノ充盈稍々強キ感アリ。上葉ノ一氣管枝ハ内腔ニ略々一致セル纖維素性膜様物ヲ出セリ。其他ハ限局性病竈ヲ認メズ。肺門部及ビ氣管枝周圍ノ淋巴腺ノ小豆大乃至大豆大ニ腫大セルモノ數個、剖面限局性病竈ヲ認メズ。氣管枝粘膜ハ全般的ニ細血管ノ充盈強ク、淡紅色乃至暗赤色ヲ呈シ、粘膜面僅カニ粗糙、泡沫ヲ含メル粘液少許附着ス。特ニ分歧部上方ニ於テハ氣管枝内腔ニ一致シテ樹枝狀、灰白黃色ノ膜様物ヲ附着セリ。其樹枝狀偽膜ノ尖端ハ可成リ末梢迄達ス。

脾臓。70 g. 外膜概シテ滑澤ナルモ上縁左側ニ於テハ指頭大ノ纖維性癒着アリ。板上ニ置クニ皺襞ニ富ム。硬度略々尋常。異常ノ硬結ヲ觸レザルモ下面脾門部ニ近ク小豆大ノ灰白黃色ノ結節1個ヲ認ム。之ニ割テ加フルニ周圍トノ境界分明、髓様、淡紅色ヲ呈ス。剖面概シテ滑澤、壓出血量常ニ比シ稍々少ク、脾材、濾胞ノ像分明。剖面ニ於テモ脾門部附近ニ認メタルト同様ナル半米粒大結節ヲ認メタル外ハ著變無シ。

腎臓。左 80 g. 右 130 g. 皮髓ノ境界分明、限局性病竈ヲ認メズ。

副腎。左右共ニ著變ヲ認メズ。

肝臓。770 g. 外膜概シテ滑澤、色淡、硬度稍々軟、特ニ異常ノ硬結ヲ觸知シ得ズ。剖面全般ニ亙リ滑澤、殆ト肉荳蔻肝ニ類スル紋理アリ。但シ壓出血量貧。剖面ニ於ケル膽管斷端ノ黃色ニ染着セルモノアルモ、其他特殊ノ病變ヲ認メズ。

總輸膽管開通ス。膽囊著變ヲ認メズ。

胃。内容殆ト空虚、汚穢黃褐色著シク潤濁セル液少許ヲ容ル。粘膜面皺襞ノ像著明ニシテ點狀溢血斑諸所ニ認メラル。特ニ皺襞頂點ニ於テ著明。内面ハ汚穢ナル黃褐色乃至灰白色膜様物ヲ附着ス。幽門ハ辛フジテ1指ヲ通ズ。

十二指腸。脾臓。著變ヲ認メズ。

舌。舌背全面ニ亙リ極メテ粗糙、至ル所灰白色乃至灰白黃色ノ偽膜ヲ附着ス。剝離比較的容易ナリ。

扁桃腺。左右共大サ小指頭大乃至拇指頭大、表面ニハ舌背ニ於ケルト同様ナル偽膜ヲ附着ス。剖面、髓様、著變ヲ認メズ。

咽頭及ビ食道。全面ニ亙リ食道ハ上方ヨリ約6cmノ部迄厚キ灰白乃至灰白黃色ノ偽膜ヲ附着ス。此偽膜ハ剝離比較的容易。

喉頭。著シク腫脹シ、其全面ニ灰白乃至灰白黃色ノ偽膜ヲ附着ス。

氣管。内腔ニ一致セル偽膜アリ。之ヲ剝離スルニ粘膜面ハ細血管充盈シ、淡紅色、稍々粗糙ノ感アリ。

甲状腺。著變ヲ認メズ。

大動脈。著變ヲ認メズ。

小腸。内容黃色、粘液便少許ヲ殆ト全長ニ亙リ認メシム。粘膜面平滑、色淡ナルモ一部ニ於テ細血管充盈ノ爲メ淡紅色ヲ呈スル部アリ。又一部濾胞ノ腫大セルヲ認ム。廻腸下端、廻盲部ニ近キ部ノ粘膜ハ稍々粗糙トナリ、淋巴濾胞ノ腫大セルヲ認ム。

大腸。殆ト空虚ニ近キモ諸所少許ノ黃褐色軟固形便ヲ附着ス。粘膜稍々潤濁腫脹セル感アルモ限局性病竈ヲ認メズ。

蟲様突起。長サ7.5cm. 尖端迄開通ス。内膜稍々潤濁腫脹ノ感アルモ物質缺損等ヲ認メズ。

直腸。内容黃褐色軟固便多量ニ充滿ス。粘膜面皺襞ニ乏シ、細血管ノ充盈強ク、淡紅乃至暗赤色ヲ呈ス。直腸中央部ニ於テハ米粒大乃至小豆大ノ溢血斑モ多數認メラレ、特ニ此部ハ暗赤色ノ度強シ。直腸上部ニ於テハ粘膜面ハ顆粒狀乃至斑紋狀ニ灰白色ヲ

呈スル部アリ。下端ニ於テハ灰白色孤在濾胞多数集在ス。又肛門部ニ於テハ痔核様結節 4~5 個存ス。表面ハ潰瘍狀ヲ呈シ。潰瘍底ハ淡紅色ノ肉芽組織ヲ以テ形成セラル。

膀胱。粘膜面凹凸ノ感アリ。全面的ニ細血管充盈シ。淡紅色ヲ呈ス。三角部ニ於テモ特ニ異常ヲ認メズ。

生殖器。子宮。卵巢共ニ著變ヲ認メズ。

B. 組織學的所見。

1. 心臓。筋纖維常ニ比シ狭小ノ感アリ。筋核又細長ナルモノ多シ。消耗性色素ヲ稍々明瞭ニ認メシムル個所アリ。間質ニ於ケル細胞浸潤ハ一般ニ然程著明ナラザルモ 1~2 個所小ナル結節狀肉芽組織ヲ形成スルモノアリ。

2. 大動脈。著變ヲ認メズ。

3. 肺臓。前記肉眼的ニ暗赤色ニシテ其一小片ヲ水中ニ投ズレバ沈降セル部ハ、全般的ニ氣ヲ容レタル肺胞稀少ニシテ、其多クノモノハ水腫液若シクハ滲出細胞ヲ以テ充サレタリ。斯カル内腔ヲ充滿セラレタル肺胞ニ於テハ或ハ多量ノ水腫液ヲ充タシ僅カノ赤血球若シクハ白血球ヲ容レタルモノアリ、或ハ又全内腔ヲ赤血球ヲ以テ充サレタルモノアリ、或ハ又白血球殊ニ多核白血球ノ多数ヲ容レタルモノアリ。又所ニ依リテハ僅少ナル纖維素ノ析出スルヲ認メシムル部アリ、或部ニ於テハ極メテ多量ノ白血球圍繞シ肺胞ノ境界不分明トナリ、小ナル網様ノ像ヲ形成セル個所アリ。之ヲ概括スルニ水腫、出血ノ像稍々著明ナル加答兒性肺炎ノ像ヲ呈シ、諸所小膿瘍ヲ點在セルモノト謂フヲ得可シ。斯カル病竈ニ於ケル細血管ノ多クハ充盈ス。肺胞壁ノ毛細血管ハ多量ノ赤血球ヲ容レ、蛇行セルモノアルモ、所ニ依リテハ然程明瞭ナラザルモノモアリ。此肺毛細血管ニ於テ特異ノ像トス可キハ極メテ多数ノ巨態細胞ヲ栓塞セシメタル事ニシテ既ニ弱點大ニ於テモ認メ得ベシ。此巨態細胞ハ其核極メテ染色性ニ富ミ、恰モステルンベルグ巨態細胞ノ如キ觀ヲ呈シ、多クノモノニ於テハ其原形質ハ分明ト缺ク。蓋シ骨髓性巨態細胞ノ肺毛細血管内ニ栓塞セルモノナランカ。此切片ノ一部ニ特ニ稍々陳舊ナル肉芽組織ヲ形成スル個所アリ。極メテ多数ノ毛細血管ヲ存置セシメ、該結節ノ周邊部ニ於テハ萎縮セル肺胞内ニ纖維素ヲ析出セシメタルアリ。又結節内ニ於テハ 1~2 腺様結構ヲ

呈スル部分アリ。内ニハ組織類廢物ヲ容レ、内面ハ圓柱狀若シクハ扁平ナル、又骰子形ノ細胞ヲ以テ覆ハレタリ。恐ラク肺胞ノ變形セシモノナランカ。又斯カル結節ノ一部ニ結締組織ノ塊狀ヲナシテ集合シ、其中央部ヨリ軟骨様組織ニ變化シツ、アルヲ認ム。

次ニ左肺葉ニ於テ小豆大結節ヲ認メタル部ニ於テハ、其大部分ノ肺胞ハ不規則ニ壓迫セラレ肺萎縮ノ像ヲ認メシム。細血管ノ充盈然程著明ナラズ。本切片ノ一部ニモ稍々陳舊ナル肉芽性結節ヲ認メシメ、斯カル部分ニ於テハ結締組織ノ増殖著明ニシテ斯クノ如ク肥厚セル結締組織内ニモ不規則ナル内腔ヲ有スル腺様組織存在シ、其内面ハ概シテ骰子形ニ近キ單層ノ細胞ヲ以テ被ハル。内腔ハ殆ド空虚ナルカ又ハ閉塞セルモノ多キモ、時ニ内腔ヲ被ヘル細胞ノ脱落シテ塊狀ヲナセルモノ、又ハ「プラスマ」細胞ノ如キモノヲ陷入セシムルアリ。斯カル肉芽性結節ノ結締組織肥厚部ニハ稍々多数ノ「プラスマ」細胞ヲ認メシム。其他淋巴球ノ窠狀出現ヲ認メシムル個所アリ。本切片ニ於テモ肺毛細血管ニ栓塞セル巨態細胞ヲ認メシム。

4. 脾臓。前述肉眼的ニ灰白黃色結節ヲ認メタル脾門部附近ノ一部ヲ檢鏡スルニ常ニ比シ集在濾胞ノ稍々大ナル感アリ。濾胞數稍々減少シ、其或物ニ於テハ硝子様物質ノ點狀ニ沈着セルモノアルヲ認ム。概シテ鬱血ノ像ヲ呈シ、又或部分ニ於テハ出血像ヲ認ム。稍々多数ノ個所ニ於テ小ナル肉芽性結節ヲ散在セシメタリ。尙ホ本臓ニ於テモ巨態細胞ノ出現ヲ認メシムルモノアリ。

5. 腎臓。細尿管主部上皮ノ潤濁甚シク核消失、原形質崩壞等ノ認メラルモノ多シ。髓質細血管稍々充盈ス。

6. 副腎。毛細血管ノ充盈極メテ著明ニシテ毛細血管内ニハ多量ノ赤血球ヲ容レ、實質細胞素ヲ壓迫セル如キ状態ニアリ。

7. 肝臓。鬱血ノ像稍々顯著ナリ。1~2ノ個所ニ於テハ小ナル初期肉芽性結節ヲ認メシム。該結節ハグリソン氏竈ニ基キ形成セラレタルモノ、如ク多数ノ淋巴球及ビ「プラスマ」細胞ヨリ成ル。

8. 腸。粘膜基底部分及ビ粘膜下層特ニ血管周圍ノ淋巴球浸潤著明ナリ。

9. 脾臓及ビ胸腺。著變ヲ認メズ。

10. 卵巣。細血管ノ充盈強ク、内ニ出血性濾胞1個ヲ認メシムル外ハ著變ヲ認メズ。

11. 皮膚。上皮ノ諸層ハ一般ニ可成リ強ク肥厚シ、所ニ依リテハ稍々不規則ナル増殖ヲ認メシム。即チ或ハ深く樹枝狀ヲナシテ皮下結締織中ニ侵入シ、或ハ反對ニ表面ニ向ヒ樹枝狀ニ突出セル個所モアリ(殊ニ口唇附近)。真皮ニ於テハ所ニ依リテハ強キ肉芽性炎ノ像ヲ呈シ、其浸潤細胞トシテハ時ニ許多ノ「エオジン」嗜好性白血球ヲ存シ、所ニ依リテハ中性多核白血球ヲ存ス(特ニ肛門部附近)。尙ホ斯カル「エオジン」嗜好性白血球若シクハ中性多核白血球ハ前記肥厚セル上皮層中ニ可成リ多數ニ侵入セルモノヲ認ムル事アリ。又皮下結締織中ニ於テ稍々強キ萎縮狀ヲ呈シ、不規則ニ散亂セル毛囊、汗腺及ビ皮脂腺ヲ認メシム。時ニ斯カル病變ヲ呈スル皮膚ハ其表面潰瘍狀ニ崩壊シ、稍々多クノ組織類癥物ヲ偽膜トシテ附着セル個所アリ。

尙ホ是等各部ノ組織片ニ就テハ Hämatoxylin-Eosin

ノ普通染色ノ外ニ Gram-Weigert 氏法、Unna-Papenheim 氏ノ Methylgrunn-Pyronin 染色、Hoffmann 氏ノ芽胞染色等ヲモ行ヒタルモ何レニ於テモ菌體並ニ芽胞ヲ認メ得ザリキ。

以上ノ如キ肉眼の並ニ組織學的所見ニ依リテ次ノ如キ病理解剖學的診斷ヲ下セリ。

〔I〕汎發性播種性「スポロトリコーゼ」。

1. 皮膚。(上膊、顱頂部、口唇及ビ其周圍、肛門部)。
2. 鼻腔、咽腔、舌、食道、胃。
3. 口腔、喉頭、喉頭扁桃腺、氣管、肺。
4. 肝臓。
5. 脾臓。

〔II〕「ネフローゼ」。

〔III〕副腎、肝臓ノ鬱血。

〔IV〕胃下垂症。

〔V〕子宮右前屈症。

III. 總括及ビ考按

以上本症例ヲ概括スルニ 15 歳ノ女子、突然舌尖部ニ發赤、腫脹ヲ生ジ、次デ惡寒戰慄、發熱ヲ伴ヒテ發病、甚シキ流涎ノ爲メ一醫ヨリ胃病ナル診斷ノ下ニ治療ヲ受ケタルモ治癒セズ、漸次増悪シ、口腔内ハ白苔ヲ以テ覆ハレ嚥下痛ヲ訴フルニ至ル。同時ニ口唇部ニ痂皮ヲ以テ被ハレタル潰瘍ヲ生ジ、他醫ヨリ「ヴィタミン」C劑ノ注射ヲ受ケ嚥下痛ハ輕快セルモ一般狀態漸次衰弱セル爲メ當耳鼻咽喉科教室ヲ訪レ入院セリ。當時口腔粘膜ハ至ル所不正斑點狀ノ白苔及ビ淺キ潰瘍形成アリ、舌中央部ニハ拇指頭大ノ腫瘍アリテ口臭甚シク、口周ニハ多數ノ結節並ニ潰瘍形成アリ。尙ホ顱頂部及ビ上膊部ニハ斯カル口唇部ニ於ケル潰瘍ノ既ニ治癒シタルガ如キ痂皮ヲ被ムレル結節各々2個存ス。

以上ノ所見ヨリ瀰蔓性纖維素性淺在性口内炎並

ニ傳染性膿瘍疹ナル診斷ノ下ニ治療ヲ試ミルト共ニ、其白苔並ニ腫瘍組織ノ培養試驗及ビ組織學的檢查ヲ反覆シテ菌決定ニ努メタル結果、其培養上一種ノ絲狀菌ヲ發見セルニ依リ沃度加里ノ内服、沃度劑ノ塗布並ニ注射ノ併用ヲ開始シタルモ病狀増悪シ、更ニ鼻閉塞、發熱、咳嗽、嘔聲並ニ呼吸困難ヲ來タシ種々治療ヲ行ヒタルモ敗血症ノ如キ症狀ヲ呈シテ遂ニ死ノ轉歸ヲ取レリ。而シテ剖檢ノ結果ハ 1) 皮膚(上膊、顱頂部、口唇及ビ其周圍、肛門部)ノミナラズ口腔、鼻腔、舌、咽腔、喉頭、喉頭扁桃腺、氣管、氣管枝、肺、食道、胃等ニ亘レル呼吸器並ニ消化器系臟器其他、肝臓、脾臓等ノ造血臟器ニ現ハレタル全身汎發性播種性「スポロトリコーゼ」、2) 肝臓並ニ副腎ノ鬱血、3) 「ネフローゼ」、4) 胃下垂症、5) 子宮右前屈症ナリキ。尙ホ生

前口腔内ノ白苔及ビ死後喉頭部ヨリ得タ偽膜ノ一部ヲ麴培養基ニ培養シ得タル結果ハ共ニ同様ナル「スポロトリコーゼ」ニ特有ナル「コロニー」ヲ生ジ。其顯微鏡的検査ニ於テモ特有ナル菌絲並ニ芽胞ヲ認メ得タレ共。組織學的ニハ孰レノ部位ニ於テモ之ヲ検出シ得ザリキ。

次ニ余等ガ今回経験セル本症例ニ基ヅキ從來發表セラレタル諸家文献ヲ抄出參酌シツ、聊カ考按ヲ試ムル事トスベシ。

抑々「スポロトリコーゼ」ハ一種ノ絲狀菌ニ依リテ惹起セラル、傳染性疾患ニシテ。本菌ハ自然界ニ植物寄生蟲體トシテ存スト信ズル者多シ。例之。Debeurmann, Gougerot et. Vaucher⁽¹⁵⁾氏等ハ「ラッテ」ヲ使用シ。Sartory⁽¹¹⁰⁾氏ハナンシー附近ノ穀物ノ穂ヨリ得タル顯微鏡的ニ Sporotrichum Beurmanni ト全ク同一ナル絲狀菌ニテ鼠ヲ使用シ。Catanei⁽²⁷⁾氏ハ井戸水ヨリ分離セル「スポロトリヒューム」ヲ「マウス」、海猿、家兎ノ皮下並ニ腹腔内ニ注射シテ、夫レ夫レ其病原性ヲ確定セリ。而シテ其侵入門戸並ニ傳染徑路ハ皮膚及ビ消化器系ヨリ侵入。次デ淋巴行。又ハ血行ヲ介シテ蔓延スルモノナリト報告セラレ^(24, 38, 46, 49, 50, 54, 61, 70, 71, 82, 85, 91, 95, 97, 99, 100, 102, 113, 115, 121, 125, 127, 130, 131, 132, 134)。殊ニ外傷ヲ受ケ易キ四肢ニ最モ多キモ。其他顔面^(18, 45, 76, 133)、軀幹等到處ノ皮膚或ハ粘膜。骨。關節。筋肉^(31, 31, 40, 51, 59, 66, 111, 112, 119)其他凡ユル内臟諸臟器ニモ其病變ヲ認ムルハ之迄報告^(5, 12-14, 41, 48, 58, 59, 67, 72, 79, 100)セラレタル多數諸家ノ臨牀例ノミナラズ。動物試験ニ依リテ確認セラレタル所ナリ。Foerster⁽⁴³⁾氏ニ據レバ 18 例中 14 例ニ於テ創口ヲ認メ。然モ其創口ハ葉又ハ穀類等植物ニ依ルトナシ。Beurmann et. Saint-Girons⁽¹⁶⁾,

Foerster⁽⁴³⁾氏等ノ「ヘビノボラズ」ノ棘ニテ損傷セル部ニ發生セル例。Blair, Jackson a. Yarian⁽¹⁷⁾, Walker a. Ritchie⁽¹³¹⁾氏等ノ木ノ棘ニ依ル損傷部ニ發生セル例。Feorge a. J. H. Cudmore⁽⁴⁶⁾氏等ノ「サボテン」ノ棘ニ依ル損傷部ニ發生セル例。獸醫ナル Carongneau⁽²⁶⁾氏ノ小指損傷部ニ 3 週間後發生セル馬ノ「スポロトリコーゼ」ヨリノ感染例。Meréchal⁽⁸⁵⁾氏ノ粗暴ナル牛ニ依ル損傷部ニ發生セル例。Beatty⁽⁶⁾氏ノアフリカヨリ來タレル靱皮ヨリ感染セルイスラント最初ノ「スポロトリコーゼ」ノ報告例及ビ Fonseca, Aureliano⁽⁴⁾氏ノ眼瞼ニ生ジタル「スポロトリコーゼ」ノ侵入門戸ハ意外ニモ靴下ノ木綿中ニ生存セルモノヲ搔爬セル指ノ爪ヨリ眼瞼ニ達センモノ、例等ハ比較的其侵入門戸ノ明瞭ナル例ナルモ。侵入門戸ノ不明ナル場合モ多シ。

年齢。性及ビ職業ニハ特別ノ關係ヲ有セザルモノ、如ク。感染機會ノ多キモノニ其例多キハ當然ノ結果ト思考セラル、モ。Gonzales et. Rivarola⁽⁴⁹⁾氏等ノ同一家族中 2 人ニ。Hodara u. Fuadbey⁽⁵⁰⁾氏等ノ同一家族中 3 人ノ兄弟ニ同様ナル「スポロトリコーゼ」ヲ生ゼン例及ビ Bonnet 氏ノ足背「スポロトリコーゼ」ヨリ發病。其後 Interkurrente Pneumonie ニテ死亡セル患者ノ妹ガ其以前原因不明ノ多發性膿瘍形成ニテ死亡セン等ハ明カニ其家族傳染ヲ思ハシムル例ナリ。

而シテ本症ハ 1) 局在性。或ハ 2) 播種性「スポロトリコーゼ」ニ分タルレ共兩型ノ混在セル場合モ亦存スルモ。屢々認メラル、ハ播種性「スポロトリコーゼ」ナリ。余等ノ涉獵セル文献ノ大部分モ播種性「スポロトリコーゼ」ニシテ

其發現部位モ全身到ル所ノ皮膚^(1,3,16)ノミナラズ其他筋肉、骨、眼、消化器^(4,8,28,81,90,106)、呼吸器系⁽⁷⁵⁾ノ諸臓器ニ生ゼシ報告アリタルモ、余等ノ症例ノ如ク口腔、鼻腔及ビ咽喉部ニ病變ヲ認メタル報告ハ Ismet⁽⁶³⁾, Danlos u. Flandin⁽³³⁾, Miencki, Marian u. Czeslaw, R. Narozewski⁽⁸⁶⁾, Pautrier, Belot u. Richou⁽¹⁰³⁾, Thibierge u. Gastinel⁽¹²⁹⁾, Collinet⁽³⁰⁾, Capart⁽²⁵⁾, Samengo⁽¹⁰⁹⁾, Ferraund u. Rabeau⁽⁴²⁾, Steward⁽¹²⁴⁾, Duverger u. Braini⁽³⁷⁾, Juan de la Cruz Correa⁽⁶⁹⁾ 氏等ニシテ、肛門部ニ病變ヲ認メタルハ Hodara⁽⁵⁷⁾, Gougerot 氏等、肺ニ病變ヲ認メタルハ Meyer⁽⁸⁸⁾, Morre, Morris a. Royle Kile⁽⁸⁹⁾, Grütz⁽⁵²⁾ 氏等ノ報告アリ。

其經過ハ長キハ數ヶ月乃至數年ニ亘リテ慢性ニ繰返シ再發スル場合アリト謂ハル。其症狀ハ又極メテ多岐多様ニシテ一見結核性、或ハ微毒性或ハ其他ノ炎症性疾患ノ如キ所見ヲ呈シ、然モ其組織學の所見ニ於テモ慢性肉芽性炎ニシテ典型的ナル護膜腫様結節「スボトリヒューム」ニ於テハ外層ハ微毒ニ、中層ハ結核ニ、最中心層ハ深膿疱ニ近似セル三層形成ノ慢性肉芽腫形成ナリト稱セラルレ共斯カル典型的ナル三層形成ハ主トシテ實驗的「スボトリコーゼ」ノ動物ヨリ得タル組織ニ於テ認メラル、事多ク人體ヨリ得タル標本ニ於テハ其時期、毒性ノ差異等ニ依リテ寧ロ散發性ノ事多ク、又菌體ヲ組織内ニ染出スル事ハ屢々困難ナリトセラレ、極メテ他ノ疾患ト誤診サレ易キ場合多ケレ共、一般ニハ全身狀態、體溫等ニハ著變無キ場合多ク、マントウ氏、ピルク氏反應並ニワッセルマン氏反應、村田氏反應等ノ如キ結核並ニ微毒反應ヲ

繰返シ検査シ、更ニ血清凝集反應、皮内反應、組織検査及ビ培養試験等ヲ行ヒテ其診斷ヲ確定スルヲ要ス^(19,104,123)。又血液所見中白血球殊ニ「エオジン」嗜好細胞ノ増加モ亦本症診斷ノ補助トナリ得ルト稱フル者多シ^(22,71)。

本症ノ豫後ハ一般ニ佳良ナルモ、時トシテ卒然汎發シ來タリ死ノ轉歸ヲ取レル事アリ。斯カル惡性ノ轉歸ヲ取りシ例ハ外國ニ於テハ既ニ數例ノ報告アルモ、本邦ニ於テハ未ダ其例ヲ見ズ。余等ノ本症例ヲ以テ嚆矢トスルモノ、如シ。即チ、余等ノ涉獵セル範圍ニテハ Ismet⁽⁶³⁾, Beurmann et. Gougerot⁽⁹⁾, Pierre et, Gougerot⁽¹⁰⁸⁾, Grütz⁽⁵²⁾, Colliner⁽³⁰⁾, Lutelle u. Debret⁽⁸⁴⁾, Münsterer⁽⁹³⁾, Patschkowski⁽⁹⁴⁾, Bonnet⁽²¹⁾, Gajkuni⁽⁴⁴⁾, Lesieur u. Marchand⁽⁸³⁾ 氏等ノ例ハ不幸死ノ轉歸ヲ取レルモノナリ。

其療法ニ關シテハ沃度加里ガ極メテ卓效ヲ奏スル事ハ一般ニ認メラレタル所ニシテ、其他沃度「ナトリウム」、硫酸銅ノ内服、自家「ワクチン」、ルゴール氏液ノ注射、沃度劑ノ外用、X線照射、手術的治療等種々行ハル、モ「スボトリコーゼ」ナル診斷ガ確定セラル、ヤ原則トシテ直チニ一先ヅ沃度加里ノ内服ハ行ハル可キモノトスラ考ヘラル、ニ至レリ。

翻ツテ余等ノ本症例ニ就テ觀ルニ一見口唇周圍ハ傳染性膿痂疹ヲ思ハシメ、又微毒ヲ疑ハシムル所見ヲ呈セルタメ、繰返シ血液ノワッセルマン氏反應及ビ村田氏反應ヲ検査セルモ、其度毎ニ陰性、血液所見ニテハ「エオジン」嗜好細胞18.5%ノ多キヲ示シ、口腔内ノ白苔及ビ舌中央部ノ腫瘍ノ一部ノ培養試験(麴培養基)並ニ組織學の検査ヲ行ヒタルニ、培養上一種ノ絲狀

菌ヲ得タルヲ以テ直チニ沃度加里ノ内服、沃度劑ノ塗布及ビ注射ヲ併用セシ所。一時輕快ノ微ヲ示セルモ再ビ増惡。敗血症ノ如キ症狀ヲ呈シテ死亡セリ。

然ラバ本症例ノ原發竈ト考フ可キ初期感染部位ハ、發熱、惡寒戰慄ヲ以テ發病セン舌尖部ノ發赤、腫脹、次イデ口腔内到處所白苔並ニ潰瘍ヲ生ゼシ口腔内炎ナリヤ。或ハ同時ニ發生セン口唇周邊ノ傳染性膿痂疹樣發疹ナリヤ。將又上膊部及ビ顙頂部ニ存セン同様結節ガ是等病變ヨリ更ニ一步先キニ發生センモノナリシヤハ詳カナラザレ共、當教室外來ヲ訪レタル際ニハ該上膊部及ビ顙頂部ノ結節ハ既ニ痂皮ヲ附着シテ治癒的傾向ヲ思ハシメタルモノナリシヲ以テ是等ガ初期病竈ニシテ、次イデ何等カノ機會ヲ得テ口腔及ビ口腔内ニ發生センモノト考フルヲ妥當ナラント思惟ス。

サレド惡寒戰慄ヲ伴ヒタル發熱ガ果シテ本症發生ニ依リテ生ゼシモノナリヤ。或ハ胃腸或ハ他ノ疾患ニ依リテ高熱ヲ發シ其際隨伴セン口腔内炎ヲ侵入門戸トシテ本菌ガ侵入センモノナリヤハ當初ハ地方ノ他醫ノ診ヲ受ケタルモノナルガ故ニ、其頃ノ病狀明カナラザルモ、其經過ハ昭和14年9月頃發熱センヨリ昭和16年1月29日死亡スル迄約1年3ヶ月ノ長キヲ示シ、鼻咽腔ヨリ漸次呼吸器、消化器、造血臟器ニ蔓延センモノナリ。

而シテ其經過中培養試驗ニ依リテ一種ノ絲狀菌ヲ認メタルニ依リ、直チニ其特效藥トモ稱ス可キ沃度加里ノ内服、其他沃度劑ノ塗布及ビ注射等ヲモ併用シタルモ一般狀態既ニ可成リ衰弱

シ、其病狀進行モ早ク、豫期ス可キ效果ヲ見ズ死ノ轉歸ヲ取リシモノナラン。

其剖檢上ノ所見ハ既述セン如ク皮膚ノミナラズ凡ユル臟器ニ播種性ニ小結節若クハ潰瘍ヲ散見セシメ、又鼻咽腔ヨリ喉頭、氣管、氣管枝、食道、胃ニ到ル迄極メテ厚キ汚穢黃褐色ノ偽膜形成アリ、其内腔ニ一致シ恰モ鑄造物ノ如ク之ヲ被覆セン感ヲ示セル部アリ。

之等所見ヨリ考フル時ハ最後ニ血行性ニ蔓延セル「スボロトリコーゼ」菌血症ニ依リテ全身衰弱ヲ來タシ、更ニ是等偽膜形成ニ依ル窒息ガ死因ナラント思考ス。

然レ共其組織學的檢查ニ於テハ孰レノ部ニ於テモ略々同様ナル慢性結節性肉芽性炎ノ所見ナリシモ、成書ニ引用セラル、所謂「スボロトリヒューム」特有ナル三層形成即チ 1) 膿痂疹樣小膿瘍形成ヲ見タル中心層、2) 結核樣ノ中間層及ビ 3) 微毒樣ノ外層ノ如キ判然タル組織要素ノ區別ハ認メ難ク、其結節性肉芽腫ハ主トシテ上皮樣細胞、「プラスマ」細胞、淋巴球等ノ浸潤集在ヨリ成ル。又ラングハンス氏巨態細胞ノ如キハ殆ド孰レノ部分ニモ認メ難ク、寧ロ肺臟、肝臟及ビ脾臟ニ認メタル巨態細胞ハステルンベルグ氏ノ骨髓性巨態細胞ヲ思ハシムルモノニシテ、種々行ヒタル特殊染色ニテモ遂ニ組織内菌體ヲ發見シ得ザリシモ、臨牀的所見、病理解剖的所見並ニ生前口腔ヨリ得タル白苔及ビ死後上氣道ヨリ剝離セン偽膜ノ一部ヲ麴培養基ニ培養シ得タル典型的ナル「スボロトリコーゼ」ノ聚落、菌絲及ビ芽胞ノ外觀及ビ顯微鏡的所見ヨリ播種性「スボロトリコーゼ」ナリト診斷セリ。

Ⅳ. 結

論

1. 本症例ハ15歳女子ニ發生セシ播種性「スポロトリコーゼ」ノ一剖検例ナリ。

其侵入門戸ハ不明ナルモ最初上膊部及ビ顙頂部ニ結節ヲ生ゼシ外。口唇周邊ノ傳染性膿痂疹様發疹及ビ瀰蔓性纖維素性淺在性口内炎ノ症狀ヲ呈シタルモ漸次病狀惡化。鼻閉塞ト共ニ38°C内外ノ發熱。咳嗽。嘔聲。呼吸困難ノ症狀ヲ呈シテ死亡セリ。

2. 其病理解剖ニ依リテ得タル所見ハ

I. a) 顙頂部。上膊部。顔面殊ニ口唇周圍。肛門部ノ皮膚ノミナラズ b) 口。鼻腔ヨリ咽喉腔。氣管。氣管枝。食道等ニ於ケル厚キ偽膜形成及ビ之等頸部臓器其他肺臓。肝臓。脾臓等ニ現ハレタル汎發性播種性「スポロトリコーゼ」及ビ II) 「ネフローゼ」。Ⅲ) 副腎及ビ肝臓ノ鬱血。Ⅳ) 胃下垂症。Ⅴ) 子宮右前屈症ナリ。

3. 其組織學の所見ハ孰レニ於テモ結節狀慢

性肉芽性炎ノ所見ナルモ所謂典型的ナル「スポロトリヒューム」ノ像ノ如キ明カナル三層形成ナラズ。散在性ニ現ハレタル上皮様細胞。「プラスマ」細胞。淋巴球及ビ「エオジン」嗜好性細胞等ノ集在ナリ。又特殊染色ニ依リテモ組織内菌體ノ染出ヲ認メ難ク。肺臓。脾臓及ビ肝臓ニ於テハ寧ロステルンベルグ氏骨髓性巨態細胞ヲ思ハシムル巨態細胞ノ出現ヲ見タリ。

4. 生前口腔内ヨリ得タル白苔及ビ死後上氣道ヨリ得タル偽膜ノ一部ヲ麴培養基ニ培養シタルニ肉眼的並ニ顯微鏡のニ典型的ナル「スポロトリコーゼ」ノ聚落。菌絲及ビ芽胞ヲ認メ得タリ。

5. 以上ノ臨牀的並ニ病理解剖の所見及ビ培養所見ヨリ本症例ハ汎發性播種性「スポロトリコーゼ」ナリト診斷シ。本邦ニ於ケル最初ノ剖検例ナリト思考ス。

摘筆ニ當リ御指導並ニ御校閲ヲ賜ハリタル恩師鈴江教授。鰐淵教授ニ深謝ス。尙ホ細菌學の検査ニ就テハ太田原教授ノ御指導ヲ得タリ。記シテ以テ感謝ノ意ヲ表ス。

本症例ノ臨牀的の方面ニ就テハ既ニ次ノ如キニ報告セリ。

1. 鰐淵源：粘膜「スポロトリヒョジス」。醫界週報。第330號。昭和16年5月24日。
 2. 鰐淵源、森川讓：「スポロトリコーゼ」ノ一剖檢。標本供覽。(會)大日本耳鼻咽喉科會熊本地方會第22回例會。大日耳鼻。47卷。872頁。昭和16年；第45回大日本耳鼻咽喉科會總會。
-

引用文献

- 1) **G. Arndt**: Vorläufige Mitteilung über einen Fall von Sporotrichose der Haut. Berl. klin. Wschr. Jg. 46, S. 1966, 1909.
- 2) **G. Arndt**: Beitrag zur Kenntnis der Sporotrichose der Haut, mit besonderer Berücksichtigung der Lymphadenitis sporotrichotica. Experimentelle Sporotrichose. Derm. Wschr. Bd. 17, S. 24, 1910.
- 3) **旭憲吉**: 診断不明ノ皮膚患者供覧。(會). 皮尿誌. 第23卷, 58頁, 大正12年.
- 4) **Fonseca, Aureliano**: Augenlid-Sporotrichose. Rev. Ophthalm. São Paulo. 1, 33, 1931, Ref. Zbl. f. Haut.- u. Geschl. krh. Bd. 39, S. 206, 1932.
- 5) **G. Basile**: Sporotricosi sperimentale con particolare riguardo alla Oto-rino-laryngologia. Annali. di clinica. medica. VI, No. 2, Ref. Internat. Zbl. f. Laryngol. Bd. 33, S. 193, 1917.
- 6) **Beatty**: Ein Fall von Sporotrichose. Brit. J. Derm. 1917, P. 270, Ref. Arch. f. Derm. Bd. 125, S. 912, 1919.
- 7) **C. E. Benjamins**: Die Sporotrichose. A. Denker u. O. Kahler: Handbuch der Hals- Nasen- Ohren- Heilkunde IV, S. 642, 1928.
- 8) **De Beurmann et Gougerot**: Sporotrichose cachectisante mortelle. Société médicale des Hopitaux, Seance du 28, 5, 1909. Ref. Berl. Klin. Wschr. Jg. 46, S. 1227, 1909.
- 9) **De Beurmann et Gougerot**: Tödliche, kachektische Sporotrichose. Bull. d. l. Soc. medic. d. hôpit. Nr. 19, P. 1049, 1909, Ref. Arch. f. Derm. Bd. 103, S. 428, 1910.
- 10) **De Beurmann et Gougerot**: Sporotrichosis. Iknographia dermatologica Fasc. III. Ref. Arch. f. Derm. Bd. 103, S. 428, 1910.
- 11) **De Beurmann, Gougerot et Vaucher**: La Sporotrichose experimentale du rat. Etude histologique des quelques localisations: Bull. et. méd. de la soc. méd. des hôp. de Paris. P. 800, 1908, Ref. Berl. klin. Wschr. Jg. 46, S. 361, 1909.
- 12) **De Beurmann, Gougerot et Vaucher**: Sporotrichose experimentale du chat. Soc. de Biol. 66, 338, 1909. Ref. Derm. Zeitschr. Bd. 17, S. 436, 1910.
- 13) **De Beurmann, Gougerot et Vaucher**: Sporotrichoses Cutanées du chat. Soc. de Biol. 66, 870, 1909. Ref. Derm. Zeitschr. Bd. 17, S. 383, 1910.
- 14) **De Beurmann, Gougerot et Vaucher**: Sporotrichoses experimentales. Soc. de Biol. 66, 595, 1909. Ref. Derm. Zeitschr. Bd. 17, S. 436, 1910.
- 15) **De Beurmann, Gougerot et Vaucher**: Sporotrichose alimentaire Ursprung. Bull. d. l. Soc. med. d. hôpit. Nr. 17, P. 909, 1909. Ref. Arch. f. Derm. Bd. 101, S. 433, 1910.
- 16) **De Beurmann et Saint-Girons**: Lokalisierte Sporotrichose der Haut. Bull. d. l. Soc. med. d. hôpit. Nr. 26, P. 174, 1909. Ref. Arch. f. Derm. Bd. 103, S. 427, 1910.
- 17) **Blair, M. D. Jackson, a. Norman C. Yarian**: Two cases of sporotrichosis infection due to barberry. J. Amer. Med. Assoc. Vol. 91, P. 96, 1928.
- 18) **Bruno Bloch**: Die Sporotrichose. Beiheft z. med. Kl. Ht. 8 u. 9, 1909. Ref. Derm. Zeitschr. Bd. 17, S. 289, 1910; Berl. klin. Wschr. Jg. 46, S. 1899, 1909.
- 19) **Bruno Bloch**: Zur Diagnose und Therapie und Sporotrichose. Therap. Monatschr. 1910, Januar. Ref. Derm. Zeitschr. Bd. 17, S. 435, 1910.
- 20) **Bondurant, C. P.**: Human sporotrichosis: Case report. South med. J. 22, 830, 1929. Ref. Zbl. f. Haut.- u. Geschl. krh. Bd. 33, S. 112, 1930.
- 21) **L. M. Bonnet**: Primäre Sporotrichose des Fersenbeines. Annal. d. Derm. et de Syphil. März. 1912. Ref. Derm. Wschr. Bd. 54, S. 564, 1912.
- 22) **Brissaud, Soltrani u. Weill**: Eosinophilie sanguine et locale dans les sporotrichoses humaines et experimentelles. Soc. Biol. 305, 1909. Ref. Derm. Zeitschr. Bd. 17, S. 55, 1910.
- 23) **Bryton**: Zit. u. Lawless.
- 24) **Burgess, J. F.**: Sporotrichosis in man. Report of a case. Arch. of Derm. Vol. 12, P. 642, 1925.
- 25) **Capart**: Ein Fall von Sporotrichosis pharyngo-laryngea. Mikroskopische Präparate. Jahres-Versammlung

- der Belgischen oto-rhino-laryngologischen Gesellschaft. Juni. 1910. Ref. Internat. Zbl. f. Laryngol. Bd. 27, S. 85, 1911. 26) **Carougeau**: Soc. méd. d. hôpit. sitz. vom 12, November, 1909. Ref. Berl. klin. Wschr. Jg. 46, S. 2361, 1909. 27) **Catanei, A.**: Reproduction de différents types de lésions sportrichosiques chez l'animal, avec un Sporotrichum trouvé dans la nature. C. r. Soc. Biol. Tom. 101, P. 447, 1929. Ref. Zbl. f. Haut-u. Geschl. krh. Bd. 30, S. 821, 1930. 28) **A. Cantonnet**: Sporotrichose palpébro-conjunctivale. La presse méd. No. 61, 1909. Ref. Derm. Zeitschr. Bd. 17, S. 64, 1910. 29) **H. S. Campbell, Frost, K. a. O. A. Plunkett**: Sporotrichotic chancre. Arch. of Derm. Vol. 28, P. 61, 1933. 30) **Collinet**: Soc. Parisienne de laryngol d'otol et de rhinol. Séance du 10 janvier. 1908. Ref. Internat. Zbl. f. Laryngol. 1909, P. 98. Zit. n. Menzel. 31) **G. D'agata**: Nekrosierende Osteoperiostitis sporotrichotica des Oberkiefers. Berl. klin. Wschr. Jg. 50, S. 1747, 1913. 32) **G. D'agata**: Sporotrichotische Granulom und vitale Färbung. Virchow's Arch. Bd. 230, S. 667, 1921. 33) **Daulos u. Flandin**: Verhandl. d. Soc. franc. d. dermat. et Syphil. Sitz. V. 1. Juli. 1909. Ref. Arch. f. Derm. Bd. 101, S. 400, 1910. 34) **土肥章司著**: 皮膚及性病学。改訂9版。270頁。 35) **土肥慶藏, 橋本喬, 寺尾平一**: 「スポロトリコーゼ」ノ一例。皮尿誌。第20卷, 741頁, 大正9年。 36) **Drwight**: Eine Zusammenfassung der Anschauung von de Beurmann und Gougerot über Sporotrichosis. J. of cutaneous diseases. Vol. 30, P. 339, 1912. Ref. Arch. f. Derm. Bd. 115, S. 57, 1913. 37) **Duverger u. Brain**: Über einen seltenen Fall von Sporotrichosis der Zunge und des Rachens. Revue hebdom. de laryngologie. No. 15, 1911. Ref. Internat. Zbl. f. Laryngol. Bd. 27, S. 408, 1911. 38) **W. Engelhardt**: Über zwei Fälle von Hauterkrankungen, hervorgerufen durch ein sporotrichonartiges Monosporium. Derm. Wschr. Bd. 79, S. 1405, 1924. 39) **Hope, Erwin**: Sporotrichosis among violinists. J. Labor. a. Clin. Med. Vol. 22, P. 708, 1937. Ref. Zbl. f. Haut- u. Geschl. krh. Bd. 56, S. 702, 1937. 40) **A. Fage**: Gomme sporotrichosique périostée avec périostose du tibia. Bull. et. mém. d. l. Soc. med. d. hôpit. de Paris. P. 879, 1908. Ref. Berl. klin. Wschr. 46, S. 361, 1909. 41) **Rodighiero, Felice**: Sulla sporotricosi sperimentale delle vie aeree superiori. Atti. soc. med. chir. Padova ecc. 9, 85, 1931. Ref. Zbl. f. Haut- u. Geschl. krh. Bd. 39, S. 798, 1932. 42) **M. Ferrand u. H. Rabeau**: Sporotrichosis vegetans und verrucosa der Nase, Tuberculosis verrucosa vortäuschend. Annal. d. Derm. et. de Syphil. Mai. 1923, Nr. 5, S. 345. Ref. Derm. Wschr. Bd. 77, S. 1180, 1923. 43) **H. R. Foerster**: Sporotrichosis. Arch. of Derm. Vol. 12, P. 418, 1925. 44) **Gajkuni, S.**: Fall von Sporotrichose. Z. Sovrem. Chir. 4, 1758, u. engl. Zusammenfassung 1763, 1929. Ref. Zbl. f. Haut- u. Geschl.-krh. Bd. 34, S. 472, 1930. 45) **Galewsky u. Linser**: Demonstration von Kranken. Ein der Sporotrichose ähnliches, durch Hefezellen verursachtes Krankheitsbild. Arch. f. Derm. Bd. 151, S. 353, 1926. 46) **Lewis, George M. a. J. Homer Cadmore**: Sporotrichosis; report of a case originating in New York. Ann. int. med. 7, 991, 1934. Ref. Zbl. f. Haut- u. Geschl. krh. Bd. 48, S. 467, 1934. 47) **Loewe, Gilbert M.**: Sporotrichosis of cervical area. J. Amer. Med. Assoc. Vol. 107, P. 1040, 1936. 48) **Berti Giuseppe**: Ricerche sperimentale sull'azione tossica dello sporotrichum beurmanni. Riv. di Biol. Bd. 4, S. 44, 1922. Ref. Zbl. f. Haut- u. Geschl. krh. Bd. 5, S. 485, 1922. 49) **Gonzales, G. e. J. B. Rivarola**: Studio micologico in due casi di sporotricosis humana. Bull. Soc. ital. Biol. sper. 6, 991, 1931. Ref. Zbl. f. Haut- u. Geschl. krh. Bd. 41, S. 371, 1932. 50) **Gougerot et Burnier**: Sporotrichose lymphangitique bilatérale Sporotrichose prof-

fessionnelle: Accident du travail. Bull. Soc. franc. Derm. 43, 69, 1936. Ref. Zbl. f. Haut- u. Geschl. krh. Bd. 53, S. 692, 1936. 51) **Gougerot, René Cohen, Duché et F.-B. Lévy:** Sporotrichose du tibia due au "Sporotrichum Gougerotii" (17^{ème} cas) posttraumatique? Bull. Soc. france. Derm. 39, 155, 1932. Ref. Zbl. f. Haut- u. Geschl. krh. Bd. 41, S. 372, 1932. 52) **O. Grütz:** Über eine eigenartige Form von sporotrichose mit Befund von Sporotrichon Gougeroti. Derm. Wschr. Bd. 81, S. 1660, 1925. 53) **Bureau Gustave, et Yves Bureau:** Sporotrichose récidivant au bout de 12 ans et résistant aux traitements habituels. Bull. Soc. france. Derm. 40, 87, 1933. Ref. Zbl. f. Haut- u. Geschl. krh. Bd. 44, S. 777, 1933. 54) **H. Hecht:** Ein Fall von Sporotrichosis. Arch. f. Derm. 116, 1913. 55) **Hekton a. Perkin:** Refractory subcutaneous abscesses caused by Sporothrix Schenckii. J. Exp. Med. Vol. 5, P. 77, 1900. 56) **M. Hodara u. Fuad-bey:** Histologische Untersuchungen bei drei Fällen von Sporotrichose. Derm. Wschr. Bd. 54, S. 50, 1912. 57) **M. Hodara:** Ein Fall von Sporotrichose der Genital- und Analgegend und der Mundschleimhaut. Derm. Wschr. Bd. 77, S. 1328, 1923. 58) **E. Hoffmann:** Über Sporotrichose (experimentelles subkutanes Sporotrichom beim Affen; verbesserte Färbung der Pilz im Schnitt). Münch. med. Wschr. Nr. 11, S. 608, 1910. 59) **本名文任:** 一種ノ「スポロトリコーゼ」ニ就テ. 日外會誌. 20回, 547頁, 大正8年. 60) **F. Howard:** Sporotrichosis. Arch. of Derm. Vol. 5, P. 531, 1922. 61) **K. Howard:** Sporotrichosis with report of an unusual case. South. Med. J. 20, 541, 1927. Ref. Zbl. f. Haut- u. Geschl. krh. Bd. 25, S. 327, 1928. 62) **G. Hügel:** Ein Fall von Sporotrichose. Arch. f. Derm. Bd. 102, S. 95, 1910. 63) **B. Ismet:** Fall von Sporotrichose um den Kehlkopf und Oesophagus. Tedavi Noulari, 1933, Nr. 1, S. 2, (Türkisch). Ref. Derm.

Wschr. Nr. 51, S. 1805, 1933. 64) **市川篤二, 大森清一:** Sporotrichose? ノ1例. (會). 皮尿誌. 第35卷, 321頁, 昭和9年. 65) **W. Jadassohn:** Zum Mechanismus der Jodwirkung bei Sporotrichose. Arch. f. Derm. Bd. 160, S. 133, 1930. 66) **E. Jeauselme, P. Chevallier u. P. Darbois:** Osteoperiostitische und artikuläre Läsionen der Sporotrichose. Die Spina Ventosa sporotrichotica, ihr radiologisches Aussehen und ihr Verlauf. Presse méd. 1911, Nr. 50. Ref. Derm. Wschr. Bd. 54, S. 479, 1912. 67) **M. Jéssner:** Experimentelle und histologische Studien über Hautsporotrichose an Ratten. Arch. f. Derm. Bd. 144, S. 139, 1923. 68) **John:** Sporotrichose. Zbl. f. Haut- u. Geschl. krh. Bd. 44, S. 498, 1933. 69) **Juan de la Cruz Correa:** Laryngitis wahrscheinlich durch Sporotrichose. Annal. de la Soc. Argentina de otorhino-laryngologia December 1914. Ref. Internat. Zbl. f. Laryngol. Bd. 31, S. 154, 1915. 70) **木原政喜:** 「スポロトリコーゼ」ノ1例. 皮尿誌. 第2卷, 249頁, 昭和9年. 71) **小林敏夫:** 「スポロトリコーゼ」ノ1例. (會). 皮尿誌. 第2卷, 523頁, 昭和9年. (原). 皮尿誌. 第36卷, 665頁, 昭和9年. 72) **小林敏夫:** 實驗「スポロトリコーゼ」. (會). 皮尿誌. 第2卷, 525頁, 昭和9年. 73) **小林敏夫:** 實驗的「スポロトリコーゼ」研究補遺. (第1報). 皮尿誌. 第38卷, 747頁, 昭和10年. 74) **小林敏夫:** 實驗的「スポロトリコーゼ」研究補遺(第2報). 長崎醫會誌. 第13卷, 1652頁, 昭和10年. 75) **Kogoj:** Sporotrichosis disseminata. Zbl. f. Haut- u. Geschl. krh. Bd. 60, S. 194, 1938. 76) **小池正晃, 樋口元周:** 「スポロトリコーゼ」ノ2例. 並ニ「スポロトリクム」ノ培養ニ就テ (會). 皮尿誌. 第20卷, 740頁, 大正9年. 77) **O. Kren u. M. Schrammek:** Über Sporotrichose. Wien. klin. Wschr. 1909, Nr. 44. 78) **L. Landowzy:** Sporotrichose hypodermique gommeuse ulcéreuse, disséminée (Sporotrichose de DeBeurmann). La presse med. No. 89, 1909. Ref. Derm. Zeitschr. Bd. 17, S. 384, 1910. 79) **T. K. Lawless:** Ein experimenteller Beitrag zur Pathologie der

- Sporotrichose. Derm. Zeitschr. Bd. 40, S. 257, 1924. 80) **T. K. Lawless**: The diagnosis of sporotrichosis. Arch. of Derm. Vol. 22, P. 331, 1930. 81) **Legry, Sourdcl et. Velter**: Sporotrichosis disseminata gummosa mit Augensymptomen (Iridozyklitis, Gummien der Iris) und Spina ventosa sporotrichotica. Bull. d. hôpit. P. 123, 1911. Ref. Arch. f. Derm. Bd. 112, S. 353, 1912. 82) **Lehmann, C. F. a. J. L. Pipkin**: Sporotrichosis. Arch. of Derm. Vol. 31, P. 589, 1935. 83) **Lesieur u. Merchand**: Primäre Osteoperiostitis sporotrichotica. Lyon méd. Bd. 117, S. 851. Ref. Derm. Wschr. Bd. 54, S. 479, 1912. 84) **Letulle et Debré**: Bull. et mém. d. l. Soc. méd. d. hôp. d. Paris Séance duss mars. 1908, P. 379, Zit. u. Menzel. 85) **Maréchal, H.**: Sporotrichose des Handrückens in Form des Kerion celsi. Annal. d. Derm. et. Syphil. 1918-1919, Nr. 5-8, P. 308. Ref. Arch. f. Derm. Bd. 125, S. 926, 1919. 86) **M. Marian u. C. R. Nardzewski**: Ein Fall von Sporotrichose der Haut und der Mundschleimhaut. Przegl. dermat. 32, 62, 1937. Ref. Zbl. f. Haut- u. Geschl. krh. Bd. 58, S. 68, 1938. 87) **K. M. Menzel**: Erkrankungen des Kehlkopfes und Luftröhre bei dermatosen. E. Durch pflanzliche Parasiten hervorgerufen Krankheiten (Mykosen). 1. Sporotrichosis. A. Denker u. O. Kahler: Handbuch der Hals-Nasen-Ohren-Heilkunde. IV Aufl. S. 602, 1923. 88) **Meyer**: Spitzenaffektion bei einer Sporotrichose leidenden Patientin. Revue méd. de la Suisse romande. Nr. 1, P. 71, 1912. Ref. Arch. f. Derm. Bd. 115, S. 372, 1913. 89) **Moore, Morris a. Roy Likile**: Generalized, subcutaneous, gummatous, ulcerating, sporotrichosis. Report of a Case with a Study of the etiologic agent. LXIX. Arch. of Derm. Vol. 31, P. 672, 1935. 90) **V. Morax**: Primäre Sporotrichose des Tränensacks. Ann. d'oculist. Januar. 1911. Ref. Derm. Wschr. Bd. 54, S. 479, 1912. 91) **森川高弘**: 「スポロトリコーゼ」ノ1例. (會). 皮尿誌. 第33卷, 129頁, 昭和10年. 92) **Louis B. Mount**: Sporotrichosis. With report of a rather unusual case. Arch. of Derm. Vol. 25, P. 528, 1932. 93) **H. O. Münsterer**: Beitrag zur Kenntnis der Dermatomykosen Südbayerns und zur Kaustik der Sporotrichose. Arch. f. Derm. Bd. 163, S. 97, 1931. 94) **Münsterer**: Sporotrichose. Zbl. f. Haut- u. Geschl. krh. Bd. 54, S. 570, 1937. 95) **中村敏郎, 有田宗太郎**: 播種狀「スポロトリコーゼ」ノ一例. (會). 皮尿誌. 第48卷, 449頁, 昭和15年. 96) **Nékam, Jun. L.**: Sporotrichosis. Zbl. f. Haut- u. Geschl. krh. Bd. 60, S. 475, 1938. 97) **Nellans, Charles T.**: A Case of Sporotrichosis in Connecticut. J. Amer. Med. Assoc. Vol. 78, P. 802, 1922. 98) **Netherton, E. W. and George Haskel Curtis**: Sporotrichosis (disseminated subcutaneous type). Arch. of Derm. Vol. 38, P. 131, 1938. 99) **西澤行藏, 田邊文四郎**: 本邦ニ於ケル「スポロトリコーゼ」竝ニ患者ヨリ檢出セル「スポロトリヒエーム」菌種ニ就テ (會). 皮尿誌. 第20卷, 49頁, 大正9年. 100) **尾山常則**: 「スポロトリコーゼ」ノ1例. 皮尿誌. 第4卷, 140頁, 昭和11年. 101) **Patschkowski**: Beitrag zur Klinik der Sporotrichose. Münch. med. Wschr. Jg. 81, S. 938, 1934. 102) **Paulus**: Sporotrichose: Zbl. f. Haut- u. Geschl. krh. Bd. 19, S. 18, 1926. 103) **Pautrier, Belot u. Richou**: Sporotrichose mit gummösen und verrukösen Hautläsionen, einen grossen Knochengumma und Läsionen der Nasenschleimhaut. Die Läsionen machten einen z. T. syphilitoiden, z. T. Tuberkuloiden Eindruck. Annal. de Derm. 1912, No. 1-3, P. 171. Ref. Arch. f. Derm. Bd. 112, S. 713, 1912. 104) **Pautrier, L. M. et. Lutembacher**: Positive Subkutanreaktion bei zwei Sporotrichosen. c. r. Soc. d. Biol. Tom. 24, P. 24, 1909. Ref. Arch. f. Derm. Bd. 103, S. 430, 1910. 105) **Pautrier et Lutembacher**: Der erste Fall von Sporotrichose durch die Subkutanreaktion diagnostiziert. Bull. d. l. Soc. Méd. d. hôp. Nr. 25, P. 137, 1909. Ref. Arch. f. Derm. Bd. 103, S. 429,

1910. 106) **De la Personne**: Sporotrichosis ocularis. Presse. méd. Nr. 9, 1912. Ref. Arch. f. Derm. Bd. 115, S. 107, 1913. 107) **Pickelmann**: Abgeheiliter Fall von Sporotrichosis (Beurmannii). Münch. Derm. Gesellschaft. Sitz. 19, 1929. Ref. Zbl. f. Haut.- u. Geschl. krh. Bd. 33, S. 309, 1930. 108) **Pierre, M. et. Gougerot H.**: Sporotrichose de Beurmann. Soc. med. d. hôp. Nr. 19, P. 994, 1909. Ref. Arch. f. Derm. Bd. 103, S. 428, 1910. 109) **Luis Samengo**: Mycose des Kehlkopfs. (Mycosis laryngea) Annal. d. l. Soc. d. Oto-rhino-laryngol. 1. H. 2. Ref. Internat. Zbt. f. Laryngol. Bd. 31, S. 116, 1915. 110) **Sartory**: Présence du Sporotrichum de Beurmann et. Gougerot sur un épi de blé. C. r. Soc. Biol. Tom. LXXVIII. P. 741, 1915. Ref. Arch. f. Derm. Bd. 125, S. 726, 1919. 111) **Sartory, A. R. u. M. Meyer**: Deux Cas d'Ostéites dues, d'une Part, au Sporotrichum Gougeroti et. d'autre part, d'une levure. Ann. Inst. Pasteur. Tom. 52, P. 424, 1934. Ref. Zbl. f. Haut.- u. Geschl.-krh. Bd. 48, S. 715, 1934, Derm. Wschr. 1934, Nr. 38, S. 1254. 112) **Sartory, A. R. et. M. J. Meyer**: Un nouveau cas de Sporotrichose Osseuse. C. r. Soc. Biol. Tom. 114, P. 1285, 1933. Ref. Zbl. f. Haut.- u. Geschl. krh. Bd. 48, S. 467, 1934. 113) **佐藤喬**: 「スボロトリコーゼ」ノ1例. (會). 岡山醫會誌. 第43卷, 520頁, 昭和6年. 114) **佐藤喬**: 酵母菌病ノ數例並ニ「スボロトリコーゼ」及ヒ皮膚贅口瘡ノ各1例. (會). 皮膚誌. 第31卷, 1295頁, 昭和6年. 115) **Schamberg**: Sporotrichosis. Arch. of Derm. Vol. 15, P. 726, 1927. 116) **Schamberg**: Sporotrichosis, Report of Case. Arch. of Derm. Vol. 16, P. 80, 1927. 117) **Schenck, B. R.**: On refractory subcutaneous abscesses caused by a fungus possibly related to the Sporotricha. John Hopkins hosp. med. Bull. 1898, P. 286, zit. n. Lawless. 118) **O. Seifert**: Pflanzliche und tiersche Parasiten. 6, Sporotrichose. A. Denker u. O. Kahler: Handbuch d. Hals-Nasen-Ohren-Heilkunde. IV Aufl. S. 420, 1928. 119) **Sicard, Bith et. Gougerot**: Sporotrichose osseux du tibia. Bull. et. mém. d. l. Soc. med-hôp. 1908, P. 877. Ref. Berl. Klin. Wschr. Jg. 46, S. 361, 1909. 120) **Erwin F. Smith**: Zit. n. Lawless. 121) **Sprecher, F.**: Zum Studium der Sporotrichose. Gazz. d. Osp. e. d. clin. Nr. 5, P. 11, 1912. Ref. Arch. f. Derm. Bd. 115, S. 107, 1913. 122) **Crawford, Stanley**: Sporotrichosis? Arch. of Derm. Vol. 16, P. 110, 1927. 123) **Robert Stein**: Die Sporotrichosis de Beurmann und ihre Differentialdiagnose gegen Syphilis und Tuberkulose. Arch. f. Derm. Bd. 98, S. 1, 1909. 124) **W. B. Steward**: Ein Fall von Sporotrichosis. J. Amer. Med. Assoc. Vol. 57, No. 6, 1912. 125) **田村一**: 「スボロトリコーゼ」ニ就テ 慶應醫學. 第10卷, 221頁, 昭和5年. 126) **武村俊雄**: 「スボロトリコーゼ」ノ1例. (會). 皮膚誌. 第23卷, 912頁, 大正12年. 127) **高橋吉定**: 「スボロトリコーゼ」ノ1例. (會). 皮膚誌. 第35卷, 447頁, 昭和9年. 128) **高橋吉定, 森川高弘**: 「スボロトリコーゼ」菌體ノ組織内所見. (會). 皮膚誌. 第44卷, 84頁, 昭和13年. 129) **Georges Thibierge u. Pierre Gastinel**: 3 Falle von Sporotrichose. Bull. et. mem. d. l. Soc. méd. d. hôp. 19 März. 1909, P. 537. Ref. Derm. Wschr. Bd. 54, S. 479, 1912, Berl. klin. Wschr. Jg. 46, S. 802, 1909. 130) **東京慈惠醫大皮膚科教室**: 「スボロトリコーゼ」臨牀畫報. 第9卷, 昭和13年. 131) **N. Walker u. J. Ritchie**: Bemerkungen über einen Fall von Sporotrichosis. Brit. med. J. 1. Juli. 1911. Ref. Derm. Wschr. Bd. 54, S. 478, 1912. 132) **White**: Sporotrichosis. Arch. of derm. Vol. 21, P. 126, 1930. 133) **Worms, G. et Le Roch**: Sporotrichose cervico-faciale. Ann. d'oto-Laryng. Nr. 5, P. 477, 1936. Ref. Zbl. f. Haut.- u. Geschl. krh. Bd. 55, S. 309, 1937. 134) **横山結**: 「スボロトリコーゼ」圖説. 臨牀皮膚境域. 第6卷, 28頁, 昭和16年. 135) **K. Zieler**: Sporotrichose. Lehrbuch und Atlas d. Haut.- u. Geschl. krh. IV. Aufl. Text band. S. 274, 1937.

(昭和16年9月15日脱稿)

附 圖 説 明

Fig. 1. 患者ノ口唇ヨリ頤部ニカケテノ膿痂疹様結節ヲ示ス。左頤部及ビ鼻孔部ニモ同似ノ皮膚炎ヲ認ム。

Fig. 2. 培養ニヨリテ得タル菌絲及ビ芽胞ノ顯微鏡寫眞。

Fig. 3. 平板培養基上ニ於ケル菌叢落ヲ示ス。

Fig. 4. 斜面培養基上ニ於ケル菌叢落ヲ示ス。

Fig. 5. 直腸及ビ脾臓ノ肉眼寫眞。本圖中肛門部ニ認メラレル潰瘍(u.)ハ「スポロトリヒーユム」ノ感染ニ依ルモノナリ。

Fig. 6. 胃。(A). 頸部臓器。(B)ノ肉眼寫眞兩者共粘膜面ニ絨メテ多クノ偽膜(p.)ヲ附着セリ。

Fig. 7. 頤部ニ於ケル結節ノ顯微鏡寫眞。表皮ノ

不規則ナル肥厚増殖ト附屬器官ノ萎縮ヲ伴フ慢性肉芽性炎ナリ。

Fig. 8. 肺臓ニ於ケル結節ノ顯微鏡寫眞。多數ノ上皮様細胞。「プラスマ」細胞。淋巴球。多核白血球トノ集團ヲ認ム。且ツ特異ナル所見トシテステルンベルグ氏型巨蕚細胞ノ出現アリ。本細胞ハ殆ド凡テ肺胞壁毛細血管内ニ栓塞セル如キ状態ニ於テ存ス。

Fig. 9. 肝臓ニ於ケル結節ノ顯微鏡寫眞。結節ノ性狀ハ略々前圖肺臓ニ於ケルモノト相似タリ。但シ巨蕚細胞ハ之ヲ缺ク。

Fig. 10. 脾臓ニ於ケル結節ノ顯微鏡寫眞。其性狀ハ肝臓ニ於ケルモノト殆ド同様ナリ。

西・森川論文附圖

播種性「スボトリコーゼ」ノ一例檢例

Fig. 1.

Fig. 2.

Fig. 3.

Fig. 4.

Fig. 5.

Fig. 6.

Drs. Hukue Nisi and Yuzuru Morikawa: A dissected case of generally disseminated sporotrichosis.

西・森川論文附圖
播種性「スボロトリコーゼ」ノ一例檢例

Fig. 7.

Fig. 8.

Fig. 9.

Fig. 10.

Drs. **Hukue Nisi** and **Yuzuru Morikawa**: A dissected case
of generally disseminated sporotrichosis.